平成２５年度

視察等の届出・報告書

（届出番号 13～15）

平成２５年度 視察等の届出・報告書（13～15）

届出番号	訪問日	氏名	参加者	訪問先・内容
13	9月26日～27日	河部辰夫	築澤敏夫・初本勝・福井荘助・福島一則	高知県大豊町（第７回全国水源の里シンポジウム）

議長　副議長　局長　GL　係　回覧

様式第１号

平成25年9月17日

真庭市議会
議長　長尾　修　殿

真庭市議会議員　河部辰夫

調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

1　区　　分　　調査研究　研修会　要請・陳情活動

2　訪　問　先　高知県長岡郡大豊町高須

3　内　　容　「第7回全国水源の里シンポジウム」

4　行　　程　別紙のとおり　9/26～27

5　事務局から訪問先への依頼　必要　・　不要

（注）複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。

議長　副議長　局長　GL　係　回覧

真庭市議会 受付 25.10.10

報　告　書

平成25　年 9 月30　日

報告者　真庭市議会議　氏名　河　部　辰　夫

下記のとおり政務調査費を使用して　研究研修　・　先進地調査　をしましたので、その結果を報告いたします。

1　日　　時	
	自　平成25　年9　月26　日（午前・午後）13　時00　分
	至　平成25　年9　月27　日（午前・午後）12　時30　分
2　場　　所	
	高知県長岡郡大豊町高須231　ゆとりすとパークおおとよ
3　用　　件	
	「第７回全国水源の里シンポジウム」
4　概　　要	
「第７回全国水源の里シンポジウム」	
「水源の里に生き続ける」～大豊から世界へ～	
私たちが暮らしている水源の里は、生命の源となる豊な緑の森林で形成され、水源養、環境保全はいうまでもなく、伝統文化や食料生産をはじめ、暮らしの重要な役割を担っている「日本の宝」です。	
現在、水源の里は高齢化の進行や、地域経済の停滞など多くの課題を抱えていますが国土、国民生活を守り続けるためには、そこに住む人々、地域の活力が必要です。	

報告書（継紙）

このシンポジウムは、こうしたかだいに取り組む住民、専門家、自治体関係者が一同に会し、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」の理念に基づく流域連携の必要性を全国にアピールするとともに、地域特性に応じた集落再生を目指すため、今後の展望を議論し、「水源の里」の活性化を図るため開催している。

開催地大豊町は、四国山地の中央部、吉野川中流域に位置し、面積の90％が森林、高齢化率53％の限界自治体である。

今こそ、山村に暮らす人々の「叫び」を、「山村の主張」として強く発信し、国土を守り、国民の生活を守る　ことが、とるべき道なのである。シンポジウムで議論をした、山村の主張を、多くの人々に届け行動につながる、明言し始まる。

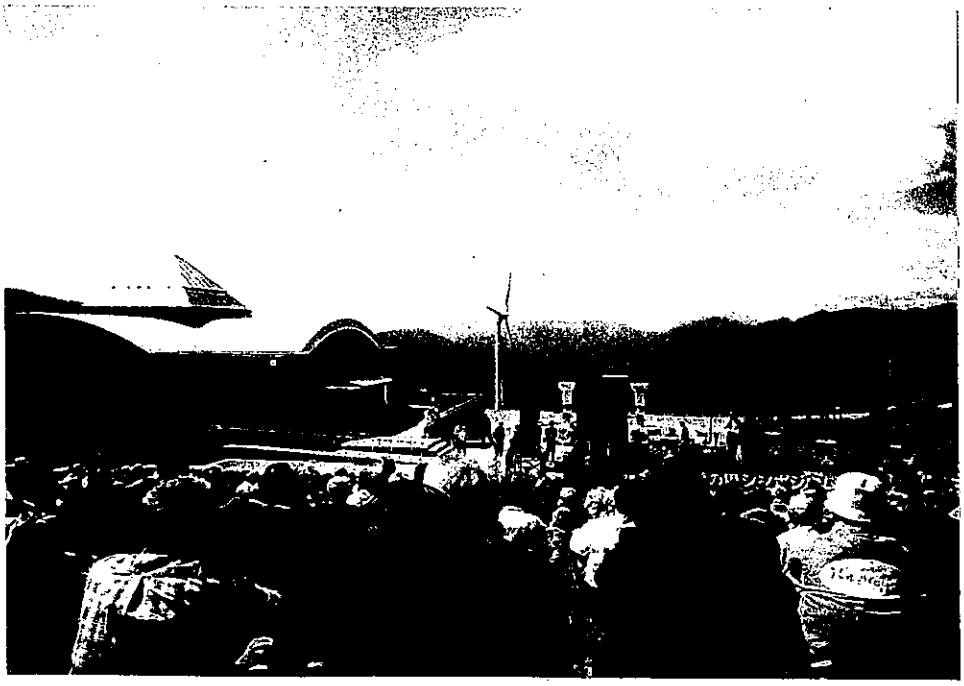
○ 緊急報告、課題「旅行業界から見た～水源の里～」講師　ＫＫ・ＪＴＢ研修所山口祥義氏よると、農山村を訪れる旅行者は増加傾向、その地域でしか体験できないことを、アピールことで人が集まり、農村の旅行プラン作る、地域活性化有効。

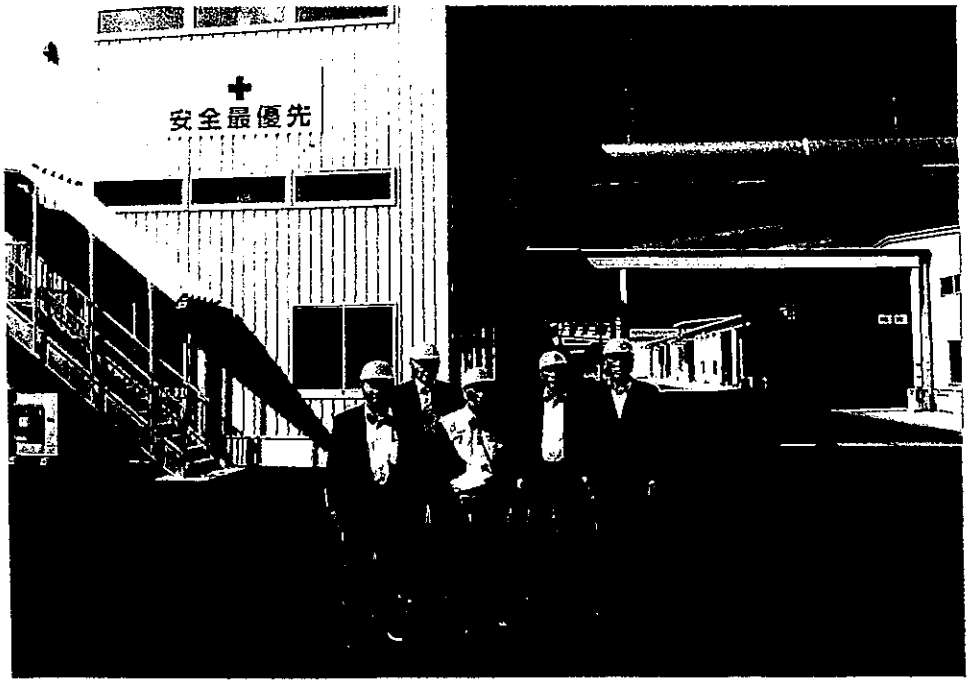
○ 基調講演、演台「日本に～すいげんの里はいらないか～」講師　明治大学農学部教授　小田切徳美氏　日本社会において、農林、農山村への「風」は一定のリズムがある、１０年を一つの区切りとして「寛容」と「批判」を繰り返している、２０１０年時代は批判の時代、しかし、91％を占める都市住宅の本音は9％の農山村の人たちに無関心であったが、今若者の農山村指向が増加し、確かな「理念」と農山村の「実践」で、元気になる活動が必要、実際に訪れたり、定住したりするために、新たな価値を作ることが、重要である。

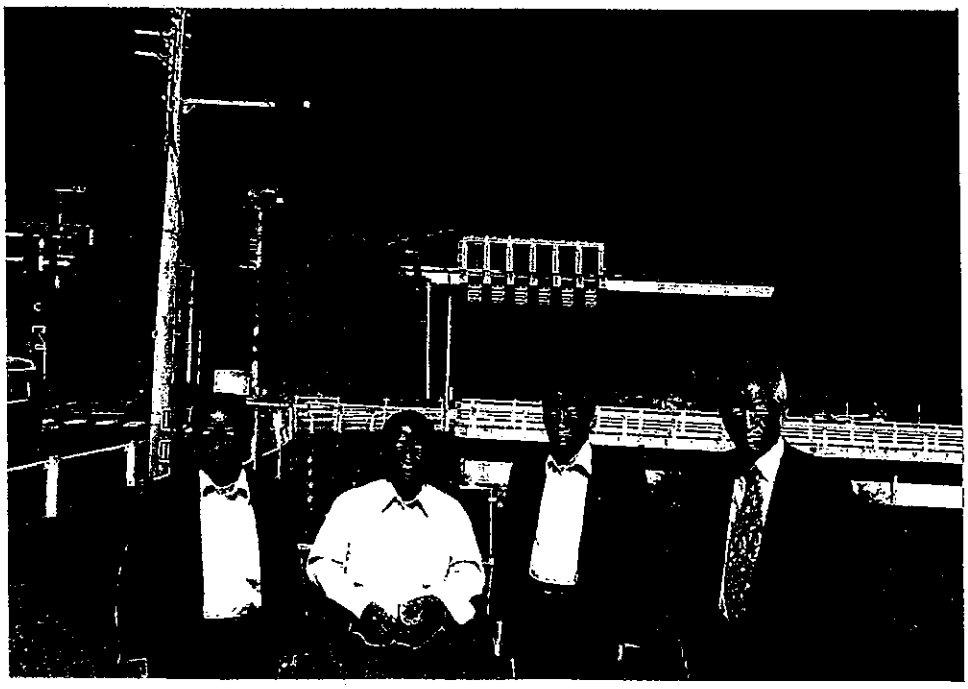
○ パネルディスカッション・テーマ　「水源からの新たな動き　大豊からのメッセージ　」司会と４名のパネリストて開始した、５分程度で仕事を通じての、水源の里への思いを述べた。

「大会アピール宣言」して終了した。

◎「現地視察」高知おおとよ製材株式会社　株主は銘建工業ＫＫと森林組合連合と大豊町と素材組合連合会である。本工場は、適正規模の機械の選定、効果的な作業工程構築し、生産向上を図り、製材加工コスト削減し、環境にやさしい施設運営務め、安定取引と高品質な製品を作り、消費者ニーズ荷的確に対応する。その結果削減コストの一部を山元に還元する、地域の林業、木材産業の活性化を図る。




安全最優先



平成２５年度 視察等の届出・報告書（13～15）

届出番号	訪問日	氏名	参加者	訪問先・内容
14	9月26日～27日	竹原茂三	草地秀育・妹尾昇	高知県大豊町（第７回全国水源の里シンポジウム）

様式第１号

平成25年 9月20日

真庭市議会
議長 長尾 修 殿

真庭市議会議員 竹原茂三

調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

1 区　　分　　調査研究　研修会　要請・陳情活動

2 訪 問 先　　高知県大豊町

3 内　　容　　水源の里シンポジューム

4 行　　程　　別紙のとおり　9/26~27

5 事務局から訪問先への依頼　　必要　・　不要

（注）複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。

議長　副議長　局長　GL　係　回覧

高岳市議会
受付
25.10.3

報　告　書

平成２５年１０月３日

報告者　議員氏名　森真会会長　竹原　茂三

下記のとおり政務調査費を使用して　研究研修をしましたので、その結果を報告いたします。

１　日　　時 自　　平成２５年　９月２６日　午後　０時４０分 至　　平成２３年　９月２７日　午前１２時００分
２　場　　所　高知県大豊町　ゆとりすとパーク大豊
３　用　　件　第７回全国水源の里シンポジウム参加
４　参加者　竹原茂三　妹尾昇　草地秀育
５　交通手段　自家用車相乗
６　概　　要　別紙の通り

研修の概要

このシンポジウムは、水源の里の持つ力と地域の宝を再確認するとともに、地域に対する誇りを醸成し、地域特性に応じた広域的な集落再生を目指すため、『上流は下流を思い、下流は上流に感謝する。』の理念に基づく流域連携の必要性を全国にアピールするとともに、流域間の情報交換・交流・連携を通じ、「水源の里」の活性化を図るため開催している
今回の開催地高知県大豊町は、徳島県、愛媛県と隣接している四国山地の中央部、吉野川中流域に位置し、面積３１４，９４平方キロメートルのうち９０％が森林、人口４０００人余りで、１年に１００人以上の人口が自然減となっている高齢化率５３％の限界自治体である。

２６日（木）12時40分オープニングアトラクション　永渕神楽
大豊町永渕地区に伝承されている神楽。国の重要無形民俗文化財に指定されている。幣の舞,双刃の舞など４つの演目を披露。手面をかぶり、白装束で芸術的な所作を展開する素朴で、芸能以前の古い名残がある神楽であった。

午後１時開会
主催者あいさつ　実行委員長　　大豊町長　岩﨑憲郎
来賓祝辞　　総務省自治行政局過疎対策室長　山越伸子
高知県知事　尾﨑正直
衆議院議員　中谷元（代理）
全国水源の里連絡協議会会長京都府綾部市長　山崎善也

第５回全国水源の里フォトコンテスト表彰式

緊急報告　演題「旅行業界からみた水源の里」
講師　株式会社JTB総合研究所　地域振興ディレクター　山口祥義
農山村を訪れる旅行者は増加傾向にある。その地域でしか体験できないことをアピールすることで人は集まってくると指摘。農村発の旅行プランを作っていくことが地域活性化に有効とも。
○　地域づくりに頑張っている地域はそれ自体が観光資源になっている。
○　都会での６０歳は田舎では若者。実務経験豊かな人材を地方に送る。
「シニア地域づくり人」について
三大都市圏内に本社機能がある民間企業に勤務する専門的なスキルや幅広い人脈を持ったシニア人材が,１～３年程度の期間、地方において地域づくり活動、地域の課題解決、公益性の高い事業等に従事し、魅力ある地域づくりを行うことで地域の元気を創造するとともに、実務経験の豊かなシニア人材の新たなライフステージの発見につなげるもの。
平成２５年度はモデル事業（国費）として実施。　・自治体とシニア世代をマッチングする仕組みを調査、研究　・事業額等　１団体あたり（モデル事業実施地方公共団体）５００万

円上限×５団体程度

基調講演　演題「日本に水源の里はいらないのか？」
ー今こそ主張し、実践しよう「農山村再生」ー
講師　明治大学農学部教授　小田切徳美

日本社会において、農林業・農山村への「風」は一定のリズムがある。１０年を１つの区切りとして、『寛容』と「批判」を繰り返している。２０１０年代は批判の時代ではないか。TPP・道州制、コンパクトシティーなどがその要因。しかし上空を吹く政治の風と、地上を吹く国民の風にずれが起こり始めている。９１％を占める都市住民の本音は９パーセントの農山村の人たちに無関心であったが、今若者の農山村指向が増加している。これをより確かにするために「理念」と農山村サイドの「実践」つまり、元気になる活動が必要である。

現在グローバルマネー投機先は①食料②エネルギー（水力、バイオマス）③水④二酸化炭素吸収源などで、これらは水源の里から供給されている。大きな理念を構築し戦略地域としての農山村へと進歩したい。実際に訪れたり、定住したりするために、新たな価値を作ることが重要。

○新しい動きに対応する農山村再生の「実践」

地域づくりの体系化

① 『暮らしのものさし』をつくる地域づくり＝『主体づくり』→『地元学』運動
② 『暮らしの仕組み』をつくる地域づくり＝『場』づくり→新しいコミュニティ＋生活インフラ
③ 「カネとその環境」をつくる地域づくり＝『条件』づくり→新しい地域産業構造

＜地域づくりの目的＞＝『新しい価値の上乗せ』

※not『創造』ー従来の価値に新しい価値をつなげる

交流の意義ー新たに強調すべきことー

① 交流の『鏡機能』ー暮らしのものさしづくりへサポート
② 交流産業ーカネとその環境づくりへのサポート

※①＋②＝地域の新しい価値をさらに上乗せ＝地域づくりの『交流環境』
※都市農村交流は『戦略的活動』

都市農村交流の具体的課題：「かかわりの階段」の形成

① 値域の産品を購入する　〈都市で出来ること〉
② 地域に対して寄付を行う　↓
③ 地域を訪れる（買う、食べる、泊まる）　〈農山村を訪ねてできること〉
④ 地域でボランティア活動を行う　↓
⑤ 地域に一定期間定住する（二地域居住）　〈農山村に定住してできること〉
⑥ 地域に定住する

パネルディスカション

演題　「水源からの新たな動き～大豊からのメッセージ

○ コーディネイター　飯国芳明　　高知大学総合科学系黒潮圏科学部門　教授
○ パネリスト　　中島浩一郎　銘建工業株式会社　代表取締役社長
○　　〃　　小笠原徳孝　山師（林業）
○　　〃　　西村直子　　ゆとりすパークおおとよマネージャー
○　　〃　　岩崎憲郎　　大豊町長

各氏、時間削減のため５分程度で仕事を通じての、水源の里への思いを述べる。

☆ 当日台風の影響か、とにかく風が強いため、緊急報告、基調講演、パネルディスカッションの全てを短縮し、予定よりおよそ１時間早く終了した。

大会アピール宣言

前文略

一　私たちは、『限りある森林と水』を水源の里として誇りをもって生き続けます。
一　私たちは、『限りある森林と水」の限りない可能性に挑戦し、水源の里を育みます。
一　私たちは、『限りある森林と水』を守る人々の叫びを発信し、水源の里の暮らしが適切に評価される社会の実現を目指します。

午後４時３０分

交流会　　会場　ゆとりすパークおおとよ　グラスハウス

ゆとりすパークおおとよマネーシャー西村直子氏プロデュウスにより、鳥獣駆除の猪、鹿を地域資源として活用。これらの地域食材をたくさん使った料理だった。

２７日（金）　現地視察　午前８時１０分発、午後０時２０分解散

Ｂ コース参加　高知おおとよ製材株式会社-----八畝の棚田-----穴内あけぼの会-----ゆとりすとパーク

○ 高知おおとよ製材株式会社　　株主　銘建工業株式会社　高知県森林組合連合会　大豊町　高知県素材生産業協同組合連合会　　平成２５年８月２６日操業開始

杉８０％、ヒノキ２０％の製剤を計画。工場は様々な種類の製品製造に対応できるラインになっている。新製品としては、新型の高温の乾燥機Ｅ－ｄｒｙⅢを用いた、変色、表面割れ、内部割れのほとんどない柱・土台・平角を目玉に生産していく予定。

○

○ 大豊町の棚田　穴内地区、八畝地区、怒田地区が有名。

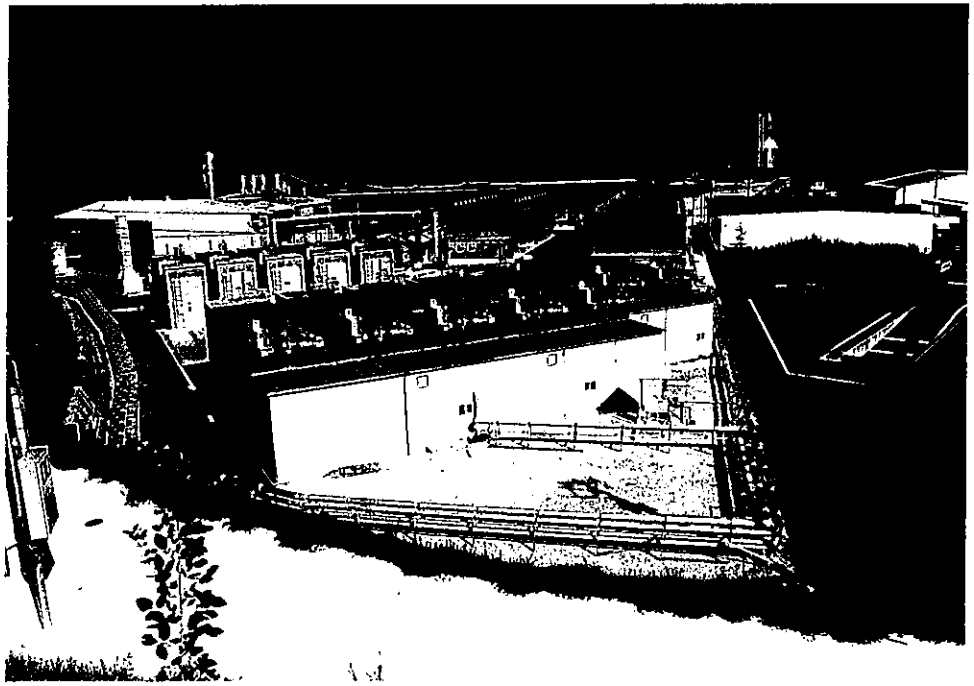
標高４００ｍ～７００ｍの急峻な斜面に美しい棚田が広がる。鹿や猪からの被害を防ぐ為に、国の補助金を活用し、集落全体に張り巡らしている。

○ 穴内あけぼの会　　代表　佐々木住雄氏　説明

穴内棚田米や豊富な山菜を通じての食の安全･安心をお伝えしている。穴内の棚田では、春の田植え体験と、オサバ様祭（今年は５月４日　土)、そして秋の収穫体験（今年は１０月１３日予定　日）等の体験イベントを通じて、交流を深めている。とのこと

柚子ジュース、えごま・ごぼう入りながし焼きの接待あり。

第7回 全国水源の里シンポジウム



平成２５年度 視察等の届出・報告書（13～15）

届出番号	訪問日	氏名	参加者	訪問先・内容
15	9月26日～27日	宮田精一	入澤廣成・氏平篤正・緒形尚	高知県大豊町（第７回全国水源の里シンポジウム）

様式第１号

平成25年9月20日

真庭市議会
議長 長尾修 殿

真和会代表
真庭市議会議員 宮田精一

調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

1 区　　分　　調査研究　(研修会)　要請・陳情活動

2 訪 問 先　　高知県長岡郡大豊町 他

3 内　　容　　第7回全国水源の里シンポジウムに参加
（行政視察）ゆずの里、馬路村

4 行　　程　　別紙のとおり 9/26～27

5 事務局から訪問先への依頼　　必要　・　(不要)

（注）複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。

議長　副議長　局長　GL　係　回覧

真庭市議会 受付 25.10.7

様式第２号

報　告　書

平成 25年 10月 3 日

報告者　真庭市議会議員　氏名　氏平篤正

（真和会）

下記のとおり政務活動費を使用して（調査研究）・（研修会）・要請陳情活動をしましたので、その結果を報告いたします。

1　日　時	自　平成 25年 9月 26日（午前・午後）7時 30分 至　平成 25年 9月 27日（午前・午後）8時 00分
2　場　所	・高知県長岡郡大豊町 ゆとりすパーク おおとよ ・高知県安芸郡馬路村
3　用　件	・第7回全国水源の里シンポジウム「水源の里に生き続ける～大豊から世界へ～」 ・先進地視察（馬路村役場、JA、ゆずの森）
4　概　要	◎1日目のシンポジウム「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を理念とした全国水源の里シンポジウム"水源の里に生き続ける～大豊から世界へ～"に参加した。まさかあの山の上へと言いながら車を走らせると、そのまさかの山の上であった。しかも野外、芝生といっても坂であり半分は土である。役所議会43年間働いているが、野外での勉強会は初めてである。山の上だけあってロケーションは素晴らしいが、台風かぜのため資料も出せない。雨にも負けず風にも負けず最後まで頑張りましょうと始まったが、予定を1時間も早めて終了した。講師が立っていられないのだ。高知大学のコーデネーターはトイレが我慢できないと言ってシンポジウムを

終了させた。市長をはじめ11人の執行部が真庭市から来ていたので近いうちに開催するのであろうと思うので私見を述べておく。勉強会は絶対音響の良いホールですること。総合司会は女性がすべき、ダトコンテストの会場が必要、街をきれいにすること、上流の蒜山は早く廃業すること、木質バイオマス発電所を可動させること、これらを整えて開催を受けないと「全国」という名に失礼にあたる。北海道からも来ている、そう思う。

○開催業事、町長のポロシャツ姿には無理がある。山村の主張と何度も言っていたが何が言いたいのかよく分からない。テーマは水源であるはずなのに、やたら「過疎」「限界集落」「山村」などの言葉が多い。代理出席が半分以上もいる。大臣賞がうつも出るコンテストは無いなどと写真家がおもしろい評価をしているのだが残念ながら現物が見れない。風力発電の羽根がすごい勢いで回っていた。

○緊急講演①JTBの山口氏、旅行業界から見た水源の里、頑張っている所に人が集真庭市もB級グルメ、バイオマスと売れ筋だと言っていた。都会の60才は田舎では若者働いた後は田舎でゆったり暮そう！明治時代は新潟が1番人口が多かった。田舎で暮らすDNAを日本人は持っている。

○基調講演②明治大学小田切氏、「日本に水源の里はいらないか？」、高知県の集落振興アドバイザーをしている。農山村にとってあったかい時代と冷たい時代が交互にやってくる。限界集落を何とかしなくてはならないとメディアも取り上げてきたが今は無い、底が浅かったということ。2010年代は新しい冷たい時代、TPP、道州制がやってくる。振り返ってみると「いつの間にか」ということになる。コンパクトシティ（壁の中に都市がある）を考えると水源の里は冷たいでなく厳しいに変わる。

・4つの戦略化を共有。・暮らしのものさしづくり、暮らしの仕組みづくり、金と暮らしと循環づくり。・地域の中に新しい価値をつくること、舞台はある→主役がいないのだ。上空の政府風と地上の国民の風は違う。地表の風はあったかい。団塊の世代は男はコミュニティを求めて農村へ向おうとしたが奥さんが行かない、政府の見通しはあまかった。60代はもう無理である。そこで地域協力隊として若者にターゲットをあてる。20代30代の若者が地域に貢献したいと田舎に向かう。都市で就職でなく都会に飽きたからではない閉塞をふりはらって若者から変わり始めている。NHKのあまちゃんの話→田舎しか知らない夏、都会へあこがれた春子、田舎へ行きたいアキちゃんと3世代がそれぞれ楽しんでいる違うことを

考える。だから人気が出た。交流産業（リピーター）がアベノミクスの3本の矢に入らなかったのは残念だ。

○パネルディスカッション

①鈴建工業の中島氏、偶然会場で会い話した。勝山高校の同級生である。バイオマスツアーを始めたのは氏平観光課長の時である。メイケン工業、木質バイオマス発電のことを省略する。大豊町で製材所の社長をしている。木造ビルのことをCLTというが木は軽い、木材は宝である。東京オリンピックの選手村を木造で建てると豊永大臣に言っていると言っていた。私が都知事ならそんな冒険はしない、中島も言うもんだ。

②山師の小笠原氏　息子があとを継いだ。若者が林業に関心を持つようになったと区長、民生委員、消防団元部長である。

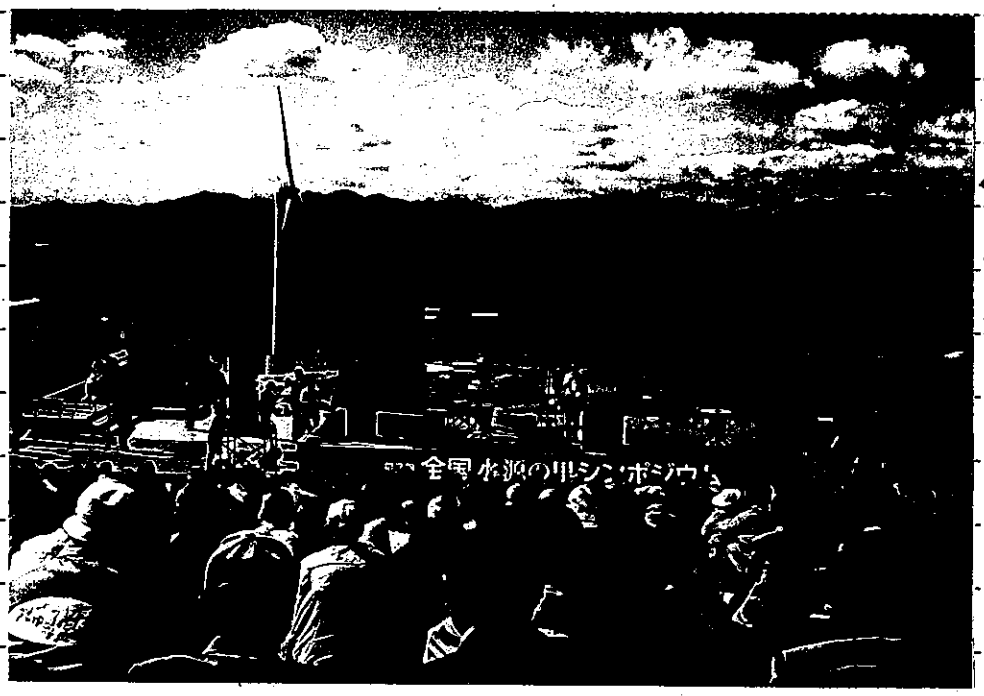
③ゆとりすとパーク おおとよ マネージャー 西村（女性）氏、60か国以上訪問、ニュージーランドでは3分の1が高級食材。高知では駆除費を仕払って山に捨てている。食べ方を知らない訳でこのイベントをしたら2000人が集まった。村が無くなると思っていたのに大繁きてくれたと老人から感謝の手紙が来た。タイのタクシン首相が日本に来てどこに行きたいですかのインタビューで祖谷温泉に行きたいと言った。国の役人の誰も知らず慌てたそうだ。

④大豊町長 岩崎氏、4600人の過疎の町、9割が森林、役場出身の町長で興味を持ったが山を生かせなかったとか、林の可能性はあるとか、大会アピールもう自力がないまいらだった。小さな大会で町長が3回も出てしゃべるのはどうかなと思った。

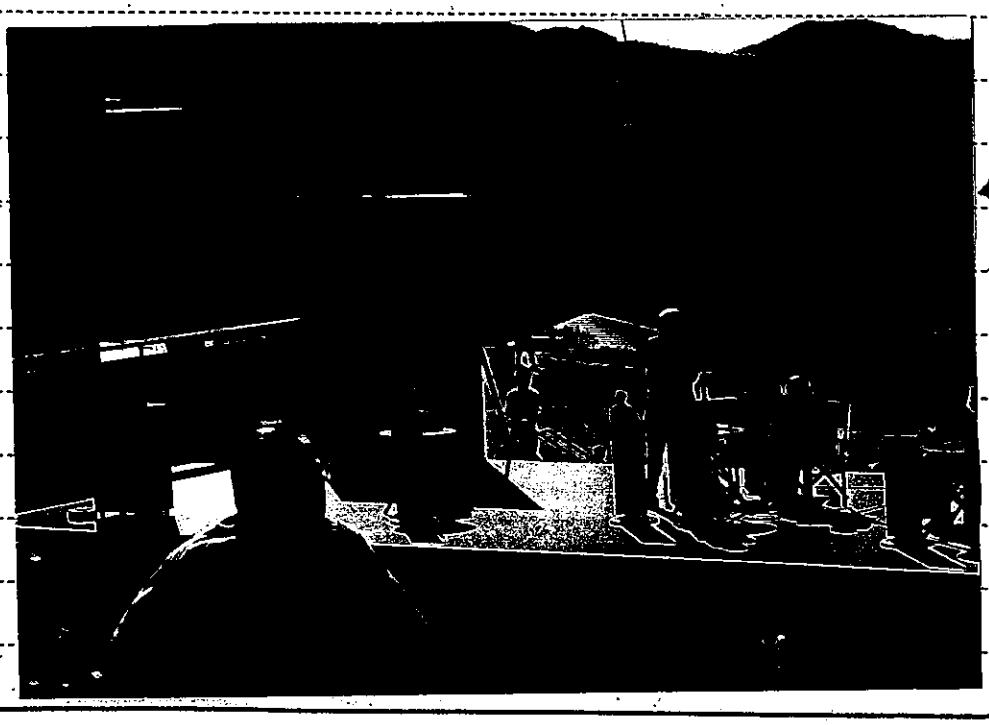
◎2日目は車を山の中に走らせ人口1000人の馬路村へ行った。役場、JA、加工場、ゆずの森パン工房を視察した。時間がゆったりと流れ、出会う人もどことなくおだやかである。JAの視察を終えるとよく冷えたごっくん馬路村というジュースを飲ませてくれた。職員がオレンジ色のポロシャツを着ていてみんな若い。この日も大型バスが来ており勉強会をしていた。過疎の山村で林業が衰退していく中、ゆずの木を植えた。昭和56年のことである。観光カリスマ（仕掛人）は現JA組合長の東谷氏と聞く。ゆずの加工品の販売を始め平成17年に売上30億円、観光客60000人と資料にある。今は温泉もあり、化粧品もあり、木のバッグの販売もあるのでおそらく売上額、観光客とも倍になっていることであろう。車なったのでお土産としてユズポン酢を20本買った。馬路村の

子供たちを起用した情報発信も人の心を掴んだのであろうか。過疎とか、限界集落とか言っていられない、真剣も頑張ろう。

○〈別件〉シンポジウム、視察の前後を利用して、知床温泉と室戸岬へ行った。台風一過で青空が広がり、四国の高くて大きい山、清流、アユ、太平洋のパノラマ、くじらを満喫した2日であった。長時間の車であったが、自然で素晴しい。



◀シンポジウムのスピーチ、あいさつする大豊町長

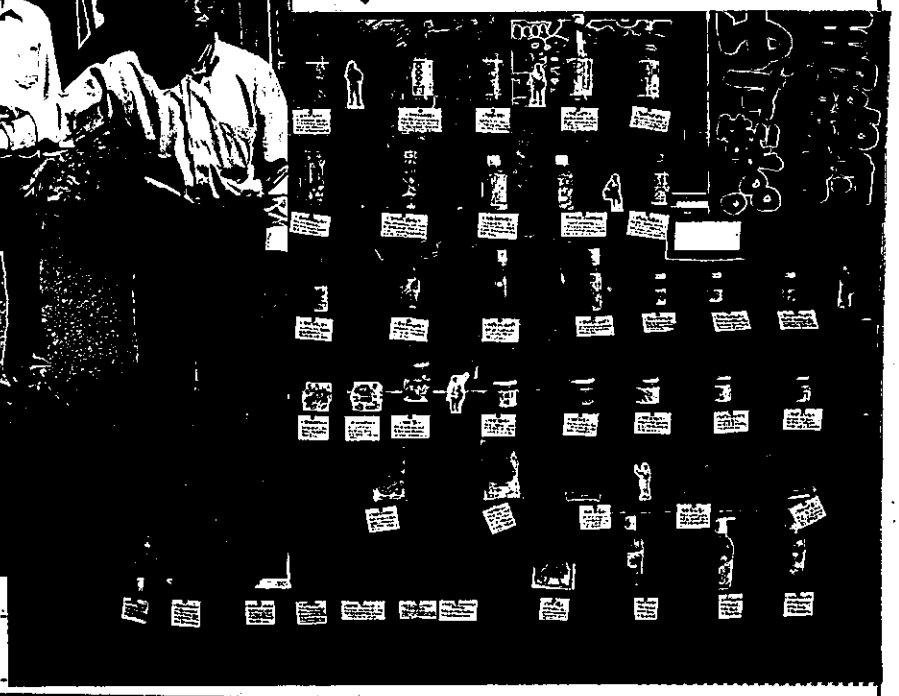


◀メルシー工業社長の中島氏

報告書（継紙）

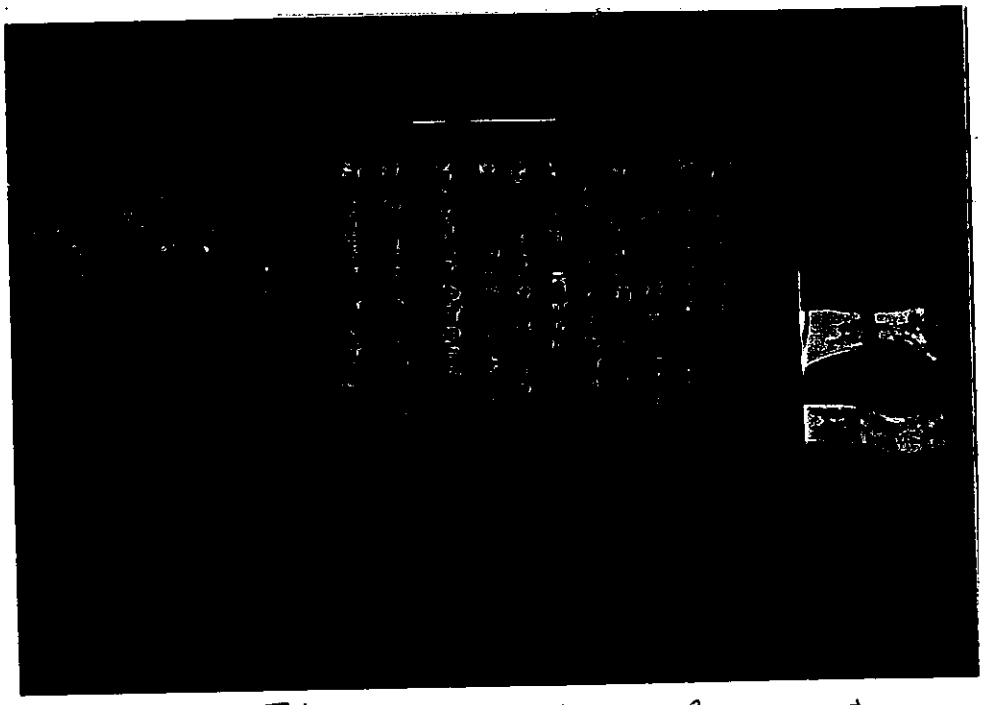
◀馬路村役場の玄関

JAのロビー　ゆず製品の陳列棚



◀ゆずの加工場内

（裏に1枚添付）



▲JAのロビー　1000人の村に90名のJA職員